

日本フランス語フランス文学会

2026 年度秋季大会

2026 年 10 月 24 日（土）・25 日（日）

会 場：静岡文化芸術大学 〒430-8533 静岡県浜松市中央区中央二丁目 1 番 1 号

大会本部：静岡文化芸術大学文化政策学部 中田健太郎研究室

mail : aiyasu1014@gmail.com

■お車でのご来場はご遠慮ください。■お問い合わせはメールでお願いいたします。

■大会費については、7 ページの案内に従い、10月19日（月）までに Peatix でチケットをご購入ください。

■懇親会に参加ご希望の方は、7 ページの案内に従い、10月13日（火）までに Peatix でチケットをご購入ください。

■10月24日（土）・10月25日（日）ともお弁当の用意がございます。ご希望の方は10月13日（火）までに Peatix でチケットをご購入ください。一般控室にて、各日 11 時から 13 時の間にお弁当をお受け取りください。

■大会参加にあたり、招請状の必要な方は学会事務局までご請求ください。

■委員会・役員会につきましては、各委員長・幹事長よりご連絡いたします。

大会費：1,000 円

■一般控室：2 階 282 教室

■賛助会員展示会場：2 階学生ラウンジ

第1日 10月24日（土）

委員会 9:00～10:00

幹事会・役員会 10:30～11:30

受付 11:30～17:00 1 階中央ホール

開会式 12:15～12:30 講堂

司会 中田 健太郎（静岡文化芸術大学）

開会の辞 安永 愛（静岡大学）

開催校代表挨拶 加藤 裕治（静岡文化芸術大学
文化政策学部長）

会長挨拶 澤田 直（立教大学名誉教授）

研究発表会 第1部 12:45～14:40

第2部 14:45～16:40

コンサート 16:50～18:00 講堂

音楽と文学のあわせ—小林海都を迎えて

ピアノ演奏：小林 海都

フランス語朗読：Steve Corbeil（聖心女子大学）

司会：安永 愛（静岡大学）

懇親会 18:10～20:10

会場：学生食堂

会費：正会員（A・B）、賛助会員：6,000 円

学生会員：3,000 円

司会：佐原 怜（静岡県立大学）

第2日 10月25日（日）

受付 9:30～16:00 1 階中央ホール

ワークショップ 10:00～12:00

1. フランス文化はいかに制度化されたのか—王立アカデミーを再
考する 2 階 280 教室

2. 「戦間期」フランス文学・思想の多元的展開—分野横断的アプロ
ーチ 2 階 281 教室

3. 「精神の楽器」—近代フランスにおけるピアノと文学・思想
講堂

特別講演 13:30～15:00 講堂

消えるものと消えないもの—戯曲翻訳の舞台裏

講師：岩切 正一郎（国際基督教大学特任教授・学長）

司会：田ノ口 誠悟（静岡文化芸術大学）

総会 15:10～16:10 講堂

議長 重見 晋也（名古屋大学）

閉会式 16:10～16:25 講堂

会長挨拶 澤田 直（立教大学名誉教授）

閉会の辞 西村 晶絵（静岡県立大学）

研究発表会 プログラム 10月24日(土)

	第1部 (12:45-14:40) ① 12:45~ ② 13:25~ ③ 14:05~	第2部 (14:45-16:40) ① 14:45~ ② 15:25~ ③ 16:05~
2 階 279 教室	分科会Ⅰ 言語学・文学理論・思想	分科会Ⅳ 20世紀②
	司会：大岩 昌子（名古屋外国語大学） ① 日本語母語話者によるフランス語文法的イントネーションの産出と知覚の関連—音響分析と知覚実験による検討 安藤 博文（静岡大学非常勤講師） 司会：竹本 研史（法政大学） ② サルトルのモーリヤック論再訪—文芸における（登場人物の）自由 関 大聡（立教大学大学院文学研究科・日本学術振興会特別研究員 PD） 司会：郷原 佳以（東京大学） ③ ジャック・デリダ「パ」と『物 ハイデガー／ブランショ』講義における「縁」の問題 高波 力生哉（東京都立大学大学院博士後期課程）	司会：永井 敦子（上智大学） ① ゴシックの城に「住む」ことは可能か？—ジュリアン・グラック『アルゴールの城にて』における居住の挫折とジャンルの変容 新莊 直大（東京大学大学院博士後期課程） ② 『星の王子さま』と旧約聖書「サムエル記上」—ダビデのイメージ 藤田 尊潮（武蔵野美術大学教授）
2 階 280 教室	分科会Ⅱ 19世紀	分科会Ⅴ 20世紀③
	司会：杉本 圭子（明治学院大学） ① 獄中への献呈本—パンフレ作家アンリ・ベール、スタンダール前史 河田 典子（九州大学大学院博士後期課程・学振特別研究員） 司会：海老根 龍介（白百合女子大学） ② 臨界の詩／詩の臨界—ボードレール「小さな老婆たち」試論 森嶋 利成（東京大学大学院博士後期課程中途退学） ③ 「風景、伝説、回想、幻想」—『フォンテーヌブロー』におけるボードレールの詩的散文 宮崎 茜（慶應義塾大学専任講師）	司会：佐藤 園子（神戸女学院大学） ① アラン・ヴェンステンを導いた二つの〈声〉—ボヌフォワ、デュブーシェそして『レフェメール』 山口 孝行（松山大学准教授） ② ル・クレジオの初期作品におけるモーリシャス観—シャザルの論評を手がかりとして 川邊 早紀（学習院大学大学院博士後期課程）
2 階 281 教室	分科会Ⅲ 20世紀①	分科会Ⅵ フランス語圏・21世紀
	司会：安原 伸一郎（明治大学） ① アンリ・フランク『聖櫃の前での踊り』にみるフランス・ユダヤ文学の新展開 鈴木 重周（日本学術振興会特別研究員 PD） 司会：浅間 哲平（明治大学） ② プルーストが聴いたドビュッシーの《ペレアスとメリザンド》—同時代の作家が捉えた戯曲とオペラの間の《une nuance》が意味するもの 関野 さとみ（立教大学兼任講師） 司会：鈴木 順子（中部大学） ③ アランにおける市場と農民—『神々』を中心に 田伏 也寸志（京都大学大学院博士後期課程）	司会：岩本 和子（神戸大学名誉教授） ① 「国王問題」とベルギー人アイデンティティー—アラン・ペレンボーム『この王国における危機』をめぐって 山内 瑛生（武蔵野大学非常勤講師） 司会：笠間 直穂子（國學院大学） ② 「娘」でありたいという志向—マリー・ンディアイ『薪になった女』における変身 今野 安里紗（会社員） 司会：谷口 亜沙子（明治大学） ③ 「ジェノサイドを知らない子どもたち」は希望の光となる—カーガエル・ファイユ『ジャカラランダの樹』におけるステラ 中川 祐人（金沢大学大学院博士後期課程）

*ひとつの発表につき 30 分程度（発表 20～25 分＋質疑応答 5～10 分）とし、各発表の間に 5 分程度のポーズを設けています。

*2024 年度より、学会誌は完全投稿制に移行しました。以下の点にご注意ください。

- ・学会誌編集委員による聴取・採点は行われません。
- ・司会による「学会ニュース」での報告は行われます。
- ・発表者は、質疑応答の時間以外にも、聴衆からのフィードバックを受けるために、（１）コメント用紙等を配布して回収する、（２）配布資料に自分のメールアドレスを掲載しておく、（３）アンケートフォームのリンクへの QR コードを掲載する等、自由に工夫をしていただけます。

コ ン サ ー ト・特 別 講 演

コンサート 10月24日（土） 16：50～18：00

講堂

ピアノ演奏：小林 海都
フランス語朗読：Steve Corbeil (聖心女子大学)
司会：安永 愛 (静岡大学)

音楽と文学のあわい
—小林 海都を迎えて

「何よりもまず音楽を (De la musique avant toute chose)」。ヴェルレーヌが『詩法』の冒頭に記したこの言葉に象徴されるように、文学と音楽は深い関わりをもってきました。多くの詩人・作家・思想家たちは音楽に憧れ、言葉では捉えきれないものを音楽の響きのなかに見出そうとしてきました。一方で、音楽もまた、文学や詩、言葉から豊かなインスピレーションを汲んできました。

本公演では、スティーヴ・コルベイク氏によるフランス語文学作品の朗読と、ピアニスト小林海都氏による演奏を重ね合わせます。前半ではシューベルトの「アレグレット」ハ短調 D.915、即興曲 変ホ長調 Op.90-2、変ト長調 Op.90-3、後半ではドビュッシーの『前奏曲集』より「音と香りは夕暮れの太気に漂う」「月の光が降り注ぐテラス」「水の精」「沈める寺」「花火」、そして同じくドビュッシーの「喜びの島」を取り上げます。

小林海都氏は、2021 年リーズ国際ピアノコンクール第2位およびヤルタ・メニューイン賞を受賞し、2024 年には第12回浜松国際ピアノコンクール第3位に入賞。ベルギーのエリザベート王妃音楽院にてマリア・ジョアン・ピリス氏に師事し、バーゼル音楽院でも研鑽を積み、国内外で活躍する気鋭のピアニストです。

本公演が、言葉のない音楽が言葉を生み、また音楽が言葉からインスピレーションを得る、そのような境位を感じ取る時間となれば幸いです。文学と音楽が響き合う空間に身を委ねるひとときをお楽しみください。

後援：静岡大学ピアノとウェルビーイング研究所

特別講演 10月25日（日） 13：30～15：00

講堂

司会：田ノ口 誠悟 (静岡文化芸術大学)

消えるものと消えないもの
—戯曲翻訳の舞台裏
岩切 正一郎 (国際基督教大学特任教授・学長)

今回の特別講演は、ある意味では「事例報告」のようなものである。開催校の静岡文化芸術大学には舞台芸術のコースが設けられている。その特徴に呼応する形の話と、ということで、上演用のフランス語戯曲の翻訳台本作りに携わってきた経験をもとに、フランス語で書かれた戯曲を日本での上演のために日本語へ翻訳する、という作業について、楽屋話も交えながら語りたいと思う。

Anne Ubersfeld の定義によれば、演劇は、永続する部分（テキスト）と瞬間的な部分（上演）という二要素でできている「逆説的なアート」である。翻訳テキストは、そこにもうひとつの逆説を加えているようだ。永続しているもとのテキストを反映しながら、それは、かなり瞬間的な性格のものとして現象する。その特殊なあり方について考えてみたい。

言葉の面に限って言えば、演劇は、台詞のなかに永続的な内容を含みつつ、声や抑揚という瞬間的なもののなかにその魅力が満ちている芸術ジャンルでもある。その魅力の創出に翻訳（者）はどこまで関わることができるのだろうか。

舞台がはねれば消えてしまうひとときの幻への、献身のようなものが、演劇のなかにはあるように感じられる。幻のなかに姿を見せる何か消えないものの現出に立ち会う瞬間があるからだろうか。

そうしたことを考えながら、では実際の制作現場で、翻訳者は演出家や俳優とどう関わり、何を求められているのかについてもお話しできればと思う。

ワークショップ

10月25日(日) 10:00~12:00

ワークショップ① 2階 380 教室

フランス文化はいかに制度化されたか—アカデミーの時代を再考する

玉田 敦子 (中部大学、コーディネーター)

栗田 秀法 (跡見学園女子大学)

隠岐 さや香 (東京大学、コメンテーター)

2026 年 6 月に名古屋大学出版会から刊行された『フランス・アカデミーの時代』(隠岐さや香・栗田秀法編著、玉田敦子他執筆)は、アカデミー・フランセーズ、絵画彫刻、碑文文芸、科学、音楽、建築という六つの王立アカデミーを総合的に論じた、管見の限り世界で初めての共同研究の成果である。従来、これらの諸機関は、文学史、美術史、政治史、科学史、音楽史、建築史といった個別の研究分野において論じられてきたため、「アカデミー」という制度そのものの全体像は十分に検討されてこなかった。

本ワークショップでは、王立アカデミーを、宮廷や行政機構の一部でも単なる愛好家の集団でもない、中間的な制度として再検討する。諸アカデミーは、王権の庇護と継続的な財政基盤のもとで、知と芸術の生産を支え、作品や学説の価値を判定する「審判」と「批評」の機能を担った。また、会員の選出、研究成果の審査と公表、知識の共有と権威づけなど、今日の世界各国の「学会」にも通じる役割を果たしていた。本ワークショップは、こうした作家・芸術家・学者の活動と社会的位置づけ、ならびに規範や評価基準の形成に制度が及ぼした影響を明らかにすることにより、アンシャン・レジーム期フランスの文学・芸術・学問を、その生産を支えた制度との関係から捉え直すことを目指す。

パネリストには、栗田秀法(絵画彫刻アカデミー)、玉田敦子(アカデミー・フランセーズ)を予定する。栗田と玉田がそれぞれ各アカデミーについて報告し、諸アカデミーの相互関係、文学・芸術・学問と制度との関係、啓蒙思想との接続についても論じる。さらに、本書の編者であり、学術機関とその制度化の歴史を専門とする隠岐さや香がコメンテーターを務め、各分野を横断する観点から議論を総括する。

ワークショップ② 2階 381 教室

「戦間期」フランス文学・思想の多元的展開—分野横断的アプローチ

藤岡 俊博 (東京大学、コーディネーター)

赤羽 悠 (早稲田大学)

石川 学 (慶應義塾大学)

原 和之 (東京大学)

第一次世界大戦終結から第二次世界大戦勃発までの期間(1919-39年)を指す「戦間期」という語は、二度の戦争がもたらした衝撃の大きさに比例し、「二つの戦争の間」という直接の語意を超えて、それ自体が一つの時代を画する独自の意義を担っている。哲学・思想・文学などを包含する広義の思想史においても、この明確な時代区分の意識にもとづいて多くの研究がおこなわれているが、特にフランスをフィールドとした従来の研究では、「戦間期」の始期に成立したコミンテルンおよびソビエト連邦との関連や、後半期に勃興するファシズムとの対峙を中心に、作家や哲学者の政治面での活動を編年的にたどるアプローチが主流だった。政治的動向は思想史の記述を最大公約数的に可能にする素地として機能する反面、事件史や人物関係にまつわるエピソードが記述の中心に置かれるなかで、「戦間期」の思想の内容的展開と政治的背景との連関が十分に論じられてきたとはいえない。

以上の問題意識のもとづく科研費課題「「戦間期」フランス思想における学際的ネットワークの多元的展開(基盤研究B)」では、この時期に『哲学』『アナール』『ドキュマン』『エスプリ』『社会学年報』など、領域横断的な知見と関心を共有する雑誌やグループが活発に活動した事実注目し、「戦間期」フランス思想の特殊性を、人文社会科学の多分野を横断する学際的なネットワークそのものに見いだす試みを進めている。本ワークショップではそのメンバーのうち、赤羽悠、石川学、原和之がそれぞれ以下の報告をおこなう。

赤羽は、モーリス・アルヴァックスの記憶論を、とりわけその政治的射程に注目しながら検討し、ナショナリズムや社会主義が台頭する「戦間期」の思想的文脈のなかに位置づける。

石川は、「社会学研究会」(1937-39年)におけるジョルジュ・バタイユの発表「牽引力と反発力」(1938年1・2月)を主要な題材としながら、生物学、民族学、宗教学、心理学、精神分析学、現象学といった諸学の成果を混交させながら展開される、この思想家の「社会学」の実践の学際性を検討することを試みる。

原は哲学者シャルル・セリュス(Charles Serrus, 1886-1946)の *Le parallélisme logico-grammatical* (1933)を中心に、フランスの哲学分野におけるソシュール思想の利用の最初期の様態について検討する。

ワークショップでは、これらの発表を介して「戦間期」フランスにおける思想および文学の多面的な理解に貢献することをめざすとともに、会員との対話や議論を通じて、あらたな研究の方向性や可能性を探っていきたい。

ワークショップ③ 講堂

「精神の楽器」―近代フランスにおけるピアノと文学・思想

安永 愛（静岡大学、コーディネーター）

浅間 哲平（明治大学）

西村 友樹雄（慶應義塾大学）

松尾 梨沙（早稲田大学）

近代フランスにおいて、ピアノは単なる演奏のための楽器ではなかった。家庭やサロンに広く浸透したピアノは、人々の感性を育み、文学・思想・音楽が交わる創造の場を形成し、多くの作家や思想家の想像力を支える存在となった。マラルメは書物を「精神の楽器」と呼んだが、本ワークショップでは、その言葉を一つの理論的な示唆として受け止め、ピアノもまた近代における「精神の楽器」であったという視点から、フランス文学・思想・音楽文化の新たな見取り図を描くことを試みる。

ワークショップでは、プルースト作品におけるピアノ（浅間）、ジッドにおけるバッハ（西村）、ジャンケレヴィッチにおけるモンボウのピアノ音楽（安永）、〈月の光〉から生み出される歌とピアノ（松尾）など多様な視点から、この問題を実演も交えながら考察する。文学研究、思想研究、音楽研究、演奏研究という異なる方法論を対話させることで、ピアノを単なる音楽実践の媒体としてではなく、近代フランス文化において感性・記憶・精神・身体を媒介する文化的装置として位置づけ直したい。

本ワークショップの会場である静岡文化芸術大学は、世界的なピアノ・楽器産業が集積する遠州地域の中核都市・浜松に位置している。近代フランスにおいて精神文化を育んだピアノを論じることが、ピアノづくりの歴史と技術が息づくこの地域において、楽器を単なる工業製品としてではなく、人文学の対象としてあらためて捉え直す契機ともなるだろう。本ワークショップを通して、文学・思想・音楽を横断する研究の可能性を探るとともに、近代フランス文化におけるピアノの意義をあらためて問い直すことができれば幸いである。

委員会

学会誌編集委員会：2 階 233 教室

渉外委員会：2 階 235 教室

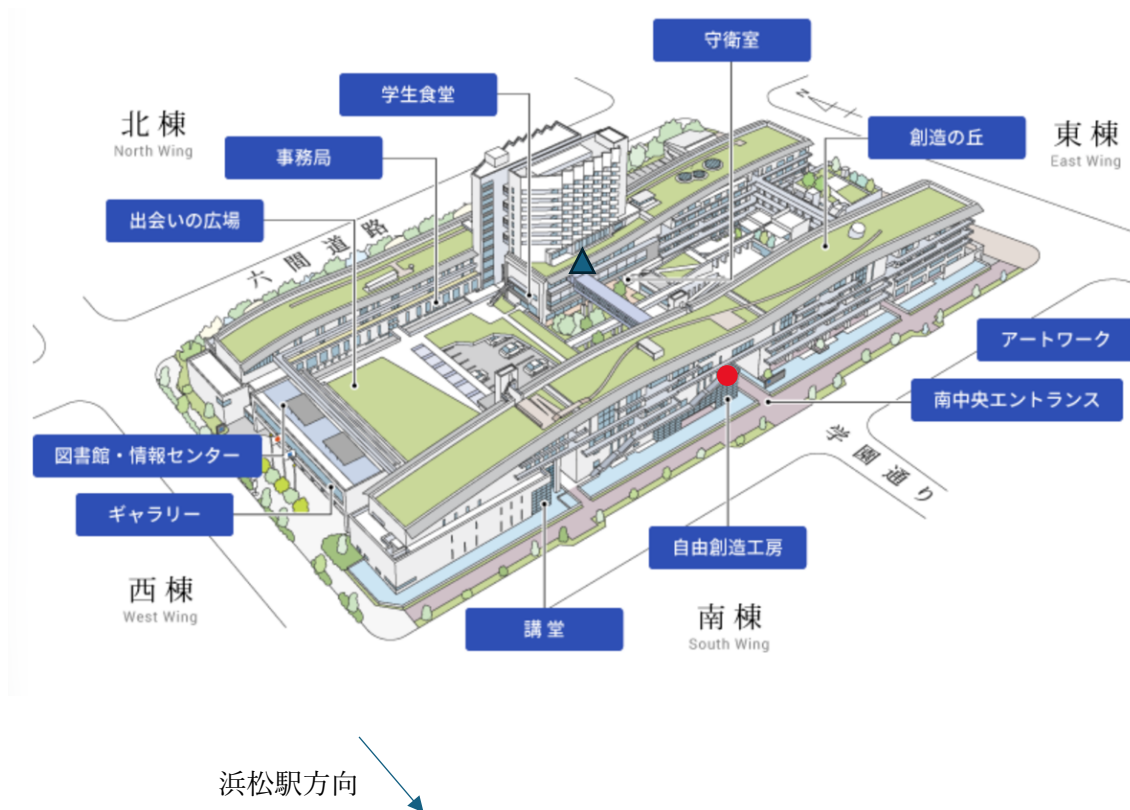
幹事会・役員会：2 階 237 教室

*なお、本秋季大会会場での研究会開催はありません。

*当日は、表示に沿って南中央エントランスより入り、受付にお進みください。構内図については、受付にてお渡しいたします。

日本フランス語フランス文学会 2026年度秋季大会

キャンパス案内



- ・構内図は、当日、受付にてお渡しいたします。
- ・●印の南中央エントランスより直進いただき、▲印の玄関より入ると、つきあたりが受付となります。掲示に沿って受付までお進みください。

大会費、懇親会費、弁当代の支払いについて

- 大会費、弁当代、懇親会費ともに以下のURLまたはQRコードからPeatixでチケットを購入してください。
- 大会費のチケット購入は、**10月19日(月)まで**にお願いいたします。
- 弁当代と懇親会費のチケット購入は、**10月13日(火)まで**にお願いいたします。会場の定員、およびお食事やドリンクの準備の都合上、基本的に当日の申し込み参加はお受けできません。事前の申し込みをお願いいたします。

	支払期限	金額	URL	QR コード
大会費	10月19日(月)	1,000円	https://sjllf2026a-shizuoka-taikai.peatix.com/view	
弁当代	10月13日(火)	1日目・2日目とも 1,500円	https://sjllf2026a-shizuoka-dejeuner.peatix.com/view	
懇親会費	10月13日(火)	正会員A・B 賛助会員：6,000円	https://sjllf2026a-shizuoka-soiree.peatix.com/view	
		学生会員：3,000円		

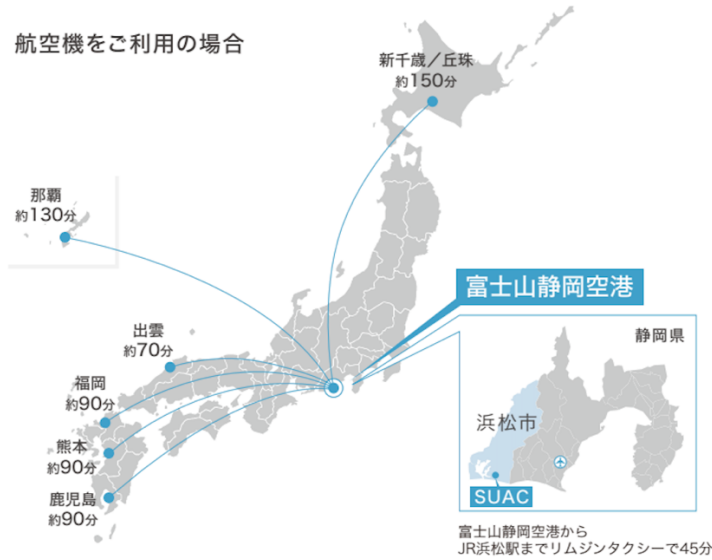
Peatix（ピーティックス）でのご購入について

- 「大会費」「弁当代」「懇親会費」（「正会員A・B、賛助会員」または「学生会員」）のチケットをそれぞれ購入できます。基本的に、当日の現金払いはお受けできません。
- 大会費は10月19日まで、お弁当代と懇親会費は10月13日までキャンセルが可能です。購入後のキャンセルについては、Peatixのサイト等から主催者にその旨申請していただく必要があります。また、所定のキャンセル手数料がかかります。
- 申し込みにはPeatixのアカウント（登録無料）が必要ですが、Google、X、Facebook、Appleのアカウントも使用できます。
- 「ご確認」のページの「姓名」「表示名」には、学会の会員名簿に載っている氏名をご入力ください（名簿の表記が戸籍名と異なる方はとくにご注意ください）。アカウントの登録名はいずれでもかまいません。
- 決済方法は、「クレジットカード」「コンビニ/ATM」（要手数料）「paypal/銀行振込」の三種類の中から選ぶことができます。
- 購入後、チケットの支払い決済ができていないかどうか、「マイチケット」または「チケット購入履歴」でご確認ください。領収書は、後日「チケット購入履歴」から「領収データ」の形で、各自ダウンロードできます（宛名・但し書は編集できます）。手書きの領収書が必要な場合は、当日受付にお申し出ください。
- 大会の入場時にスマートフォン等でのQRコードの提示は不要です。また、アプリのダウンロードも不要です（受付にてご購入者名簿を確認いたします）。
- 学会などの参加費徴収にPeatixを利用するケースが増えてきたため、Peatixの領収データと大会詳細ページの提出をもって、個人研究費からの「学会費」の支出を認める大学も多くなっています。ご所属の機関でそうした措置が認められるかどうかは、各自ご確認ください。
- ご購入後のチケットを他の人に譲渡することはできません。
- 大会費、懇親会費とも、Peatixでチケットを購入できるのは本会の会員に限ります。

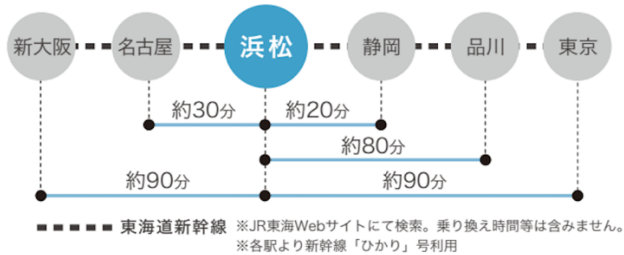
静岡文化芸術大学（SUAC）までの交通案内

アクセス

航空機をご利用の場合



新幹線をご利用の場合



浜松駅からバスをご利用の場合

遠鉄バス（約10～15分間隔で運行しています）

浜松駅北口バスターミナル10番のりば→バス停「文化芸術大学」下車

※浜松駅北口バスターミナル10番のりばから出ているバスは、「文化芸術大学」バス停を通ります。ただし、系統番号2番を除きます。

※本学へお越しの際は、公共の交通機関をご利用ください。

*当日は、右上の地図の★で記した南中央エントランスより、受付にお進みください。構内図は、当日、受付にてお渡しいたします。

託児サービスについて

大会会場内での託児所の開設はありませんので、学会による託児料金の補助制度をご利用ください。各自で託児所をご利用いただいた場合、その料金について子ども1人につき1日最大5,000円までの補助が受けられます。学会ホームページより「託児サービス利用料補助申請書」をダウンロードのうえご記入いただき、領収書を添付して学会事務局にメールで送付してください。